
暗愚の歩む道

南無阿弥拉麵

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

暗愚の歩む道

【Nコード】

N1889R

【作者名】

南無阿弥拉麵

【あらすじ】

完全凍結。再開は未定です。

第一話 前世の記憶を持つ男

俺の父親である劉焉は、漢の魯の恭王の後裔で、洛陽令、冀州刺史、南陽太守、宗正、太常を歴任した所謂エリートだった。そんな親父はある日、霊帝におねだりをした。各州への牧の設置と、益州への赴任だ。皇族のホープは頼むことがでかい。

それまでの州のトップは刺史だったが、これは太守や相のチエツク係・調整役のようなもので、太守や相よりも俸禄が低かったから舐められていた。だからもつと高ランクの州の執政官を中央から派遣して、地方の乱れを引き締めよう、という案だ。

これだけ聞くと優秀な政治家の意見に聞こえるが、その牧に自分を任じてくれと言っているのだから、あけすけに言えば「国を切り取って、独立したいんだけど」と言っているようなものだ。ほとんど居直り強盗と変わらない。

親父のプレゼンになぜゴーサインが出たのか、その理由は定かではない。霊帝がヤケクソになっていたのか、宦官と外戚がヤケクソになっていたのか、もしくはその両方だと俺は睨んでいる。

まあ洛陽の豪邸に住んでいるような奴らにしてみれば世界の中心は洛陽で、交州とか益州とか、興味のまるでない未踏の地でしかない。そこにどんな権力争いがあるとか、そこを基盤にどういう伸し上がり方を画策する人物が出てくるとか、対岸の火事だったのだろう。益州に親父を送っただけではなく、冀州牧に劉虞、荊州牧に劉表と任命したわけだから、劉邦が劉氏を各地の王に任命して王朝を強化したくらいのイメージでOKしたのかもしれない。

親父が益州に行くことになったのは、侍中の董扶という人物の手引きだった。「益州には天子の気がある」とか何とか言っていたようだが、董扶は益州の広漢出身だ。権力抗争に乱れる地元を憂いて、

有力者に治めてもらおうという魂胆だったのだろ。そのための同盟者として、親父を選んだだけの話だ。親父も腐った洛陽から離れたかったのだ、それに従った。

無事益州に赴任した親父は、董扶が期待したとおりに益州の在地勢力を手の上で転がしながら、兵乱を抑えているらしい。有力者を味方に付けて反乱を抑えた後、その有力者すら滅ぼしてオンリーワンになっていったのだ。

ただのおっさんにしか見えないが、そのへんはさすがに牧を任されるだけあって、並の手腕じゃない。劉表も同じようなやり方で荊州を掌握したと聞く。だが一番やばいのは劉虞だ。なんか徳だけで異民族まで従わせる勢いらしい。こいつが皇帝やればいいんじゃない、えの、と思わんでもない。

俺の名は劉璋、字は季玉。そんな有能な親父の四男坊で、前世の記憶を持つ男だ。

第二話 ？義の願い（前書き）

この小説は恋姫無双の二次創作です。

作中のできごとは正史、演義双方を参考にしていますが、原作に合わせ設定を変えています。鵜呑みにしないでください。

第二話　？義のお願い

俺は現在、長兄の劉範や次兄の劉誕と共に靈帝に近侍として仕えている。優秀な親父によつてビシバシ鍛えられた二人の兄はやっぱり優秀で、近侍の中でも頭二つほど飛び抜けていた。しかし本当の天才はもう一人の兄、俺と歳が一つしか変わらない劉瑁の方だった。幼い頃から非凡な才を発揮し、親父に最も愛され劉家の麒麟児と呼ばれた彼は、兄弟でただ一人、別部司馬となり親父に同行している。上の兄二人とはあまりうまくいっていないので、仲の良い瑁兄が居なくなってしまったのは、少し寂しい。しかし、洛陽には親友がいた。？義という瑁兄とタメの男で、議郎を務めている。劉家と先祖代々仲良しこよしの家柄で、いわゆる家族ぐるみの付き合いをしていた。こいつが最近の俺の主なヒマつぶしの相手だった。

ある日、自宅で嫁さんと乳繰り合っているとき、？義の訪問を受けた。長男の循に対応を任せ、その間も揉み続けていた乳を舐り直した。俺は愛に生きているのだ。

きっかり一時間後、？義の待つ部屋に赴いたら、笑顔で循と談笑していた？義がえらい顔で睨みつけてきた。間の悪いお前が悪い。

あと、循が怯えてるぞ、？義。

「なんかあったのか。お前が訪ねてくるなんて、珍しい」

いつもはヒマを持て余した俺が酒壺担いで？義の家を尋ねるのが常だった。なんだかんだで優秀な義郎で、それなりに忙しいこいつがわざわざ足を運んでくるのは、本当に稀だ。

「少し、話したいことがある」

そしてこいつはそういうとき、やつかいな問題を引っ提げて来るが多かった。

頷き、目で循に退室を促す。が、鈍い息子はまったくこちらの意図を察してくれなかったので、口に出して言った。

「循、闡の相手でもしてろ」

次男の闡はまだ七歳で、循によく懐いている。

「父上、循も？義様のお話が聞きとうございます」

黙ってバカ息子の頭を叩いた。十歳にしてはたしかに賢い子だが、いささか好奇心が強すぎる。それに頑固極まりないのだ。俺に似ず、追い出すのは骨が折れるかもしれない。

「よいではないか李玉、話を聞かせるくらい。それに、この子の才を育てることになるやもしれぬ」

？義はなぜか循を買っていた。士を好むところのある男だが、循にかけける期待は、俺が思うにやや大きすぎる。将来は我が娘を嫁がせたいと公言するほどの目の掛けっぷりだった。

「本当でございますかっ」

循は？義の言葉に目を輝かせて俺を見る。めんどい。まあ？義がいいと言っただ。それほど重大な話でもないのだろっ、と思ひ許可する。

「だが口を出すんじゃないぞ、聞くだけだからな」

好奇心大盛な子供がなぜなにを繰り返すのを未然に防ぐ。大人の話に混ざれて嬉しい循は笑顔で頷いた。

？義の話は簡単だった。党人を逃がすのを手伝え。それだけだった。見誤っていた、？義の循に対する期待の大きさを。ガキの前で話す話じゃねえだろ。アホか。

党人というのは党錮の禁と言われる大規模な政争で官職を辞めさせられたやつらのことだ。対立したのが宦官だったため、免職で済まずに現在進行形でバンバン殺されている。死者は数百人に及ぶ。もちろん協力者もそれなりの罰を受ける。ていうか殺される。

「アホ言ってんなよ？義。負け犬助けてなんの得がある。そんなものに命賭けれるか」

「父上！負け犬とはなんですか。悪逆な宦官共に、天下の豪傑と知識人が排されているのですよ。これはもう、漢朝の危機です。今、

皇族として力を振るわずどうするといふのです」

循が鼻息荒く言い募る。

「循の言うとおりだ、李玉。洛陽の心あるものはすでに、何？殿と袁紹殿を中心として活動している。怖気づくと、名が廃るぞ」

？義が循を同席させたのは、応援が欲しかったからなのかもしれない。あからさまに俺が嫌がる案件だと思つたのだろう。正解だ。大正解。ぜってー付き合つてやんねえ。

「党錮の禁はもともと外戚と宦官の派閥争いだ。首を突っ込むつもりはない。何？は袁紹の人脈を利用し反体制運動をしているにすぎず、袁紹は何？の名声と知恵を利用して名を上げようとしているだけだ。それに四世三公の袁氏は、桓帝の宦官の時代の一度目の党錮で学び、靈帝の宦官の時代に起こつた今回の党錮では宦官と連なり、政權の中枢に返り咲いた。ぶっちゃけバリバリの濁流派だ。そのくせ袁紹は家の方針に叛き、陳蕃につらなる清流派と付き合っていた。ただの跳ねつ返りだ。袁紹は傍流の出だからな、なんとか名声を得ようと必死なんだろ。案外純粹に朝廷と共に腐っていく家に嫌気がさしたのかもな。どっちにしろアテになるようなシロモノじゃないさ」

？義は意外にも俺が宮廷内の動向について熟知していることに動揺していた。こつちだつて腐つても元現代人だ。情報の有用性については熟知している。帝に近い位置にいるのに、何もしていないなんてありえない。戦場なのだ、宮廷は。油断しているとたやすく首が飛ぶ。物理的に。

「そもそも、さっきも言つたとおりこれは反体制運動だ。皇族として加担する筋合いはない。それに、陛下は党人を恐れ、憎んでいる。まあ当たり前だわな、やつら過激な革命派で、中には陛下を害することすら厭わんものもいるんだから。それに、宦官は手強いぞ」

「臆したか、李玉！」

煮え切らぬ俺に？義は発破をかける。効かねえ。

「臆すも臆さねえもねえよ、事実だ。大長秋、曹節。ありやあバケ

モンだ。桓帝の弟まで殺しやがるんだ。世間知らずの坊ちゃん嬢ちゃん集めたところで、敵いやしねえよ」

「もうよい、貴様には失望した！」

全くやる気のない俺にキレた？義は、足を踏み鳴らしながら部屋を出て行った。俺は鼻クソをほじりながら見送る。どうせ後で冷静になって振り返って、俺が正論しか言っていないことに気づいて勝手にまた怒るんだろうな。そのころにまた酒でも持っていこう。

「父上」

振り返ると、循が不安そうに俺を見上げていた。そういや途中から俺の話を理解するのにいっぱいだったらしく、しゃべらなくなってたな。

「循は、？義様と父上のどちらが正しいか、わかりませぬ。ですが、党人が悪人とは思えぬのです」

循の頭に手を乗せ、くしゃりと撫でる。

「ものの善悪は常に勝ったほうが決める。だから、勝たなきゃいけねえ。後のことは、勝ってから考えりゃいいんだ」

この時代は、簡単に人が死ぬんだから。

第二話 ？ 義のお願い（後書き）

大長秋とは宦官の最高位です。曹節はよく宦官の代表格的な扱いをされる張譲より、ずっと権力があつたようです。清流派との抗争を生き残り、寿命を全うしたことからもその圧倒的な実力がわかります。

主人公は原作知識もないし、三国志の知識ありません。ただの元現代人です。転生してからも色々あつたのですが、それはまた他のところで書く予定です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1889r/>

暗愚の歩む道

2011年8月21日14時22分発行